

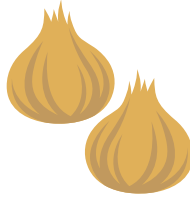


# 野菜

## たまねぎ

### ◆病害虫防除

4月上旬～5月上旬に曇雨天の日が続くと白色疫病やべと病の発生が多くなる。常発地や排水の悪いほ場は特に注意する。溝を切って排水を良くするなど、耕種的防除に努める。発病を認めた場合は、表1のいずれかの薬剤を散布する。



## 水なす

### ◆露地(トンネル早熟)栽培

水なすのトンネル早熟栽培は4月中旬以降に定植時期に入る。露地栽培では無理な早植は低温障害を受け、適期に定植した場合より生育が遅れることがあるので、4月下旬以降、遅霜の心配のなくなった頃に定植する。水なすは作期の長い野菜である。そのため、作付けほ場には、乾燥牛ふんなどの粗大有機物や堆肥、石灰質肥料、苦土肥料などを定植の1カ月前に施し、土になじませておく。

元肥は定植2週間前に施す。収量は根の量に大きく左右されるので、できるだけ高いうねを作り、深くまで根が広がるようにする。定植7日前には、植え穴を掘ってトンネル被覆し、地温を高めておく。

なす科の作物を2、3年作付けしていないほ場に植え付ける場合は自根苗でも良いが、連作ほ場に作付けする場合は接ぎ木苗を利用する。蕾の出ていない若苗を定植すると樹勢が強くなり、果実の肥大が悪くなりやすいので、蕾の充実した苗を植え付ける。若い購入苗の場合は4～5号ポットに鉢上げして育苗し、適期の苗に仕上げる。

定植は浅植とし、接ぎ木部分が土の中に埋もれないように注意する。4本仕立ての場合、1番花が日当たりの良い同一方向に、3本仕立ての場合は、交互になるように植え付ける。

### ◆病害虫防除

生育初期にアブラムシ類が発生するとウイルス病による被害が大きいため、定植時に表2のいずれかの薬剤を処理する。



## 水なす 定植適期の苗 (4～5号ポットの苗)

- ① 葉数9枚前後、葉が大きくすぎず厚みがある。
- ② 株が充実している。
- ③ 1番花の蕾が大きく充実している(蕾が下を向いている(開花始め))。
- ④ 根が白く根量が多い。
- ⑤ 1番花の直下の側枝が育っている。
- ⑥ 台木と穂木の癒合部がしっかりしている。
- ⑦ 病害虫の発生がない。

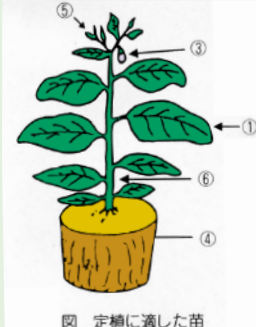


図 定植に適した苗

## ねぎ

### ◆病害虫防除

さび病の発生に注意する。さび病は、春(4～6月)に雨が多く、低温が続くと多発する。多発後に薬剤散布を行っても効果が低いので、発病初期に予防的に薬剤散布を行う(表3)。

なお、ねぎは薬剤が付着しにくいので、水和剤を使用する場合はグラミン等の展着剤を必ず添加する。

## しゅんぎく

### ◆病害虫防除

しゅんぎくは、生育初期の低温と後期の長日の影響で、抽苔する株が出るため、早めに収穫する。ハウス栽培ではハウスの内が高湿になるので、ハウスのサイドを開けて換気に努める。この時、ハウスサイドに防虫ネット(1mm目合)を張ると、マメハモグリバエなどの害虫が侵入するのを減らすことができる。マメハモグリバエに登録のある主な農薬は表4のとおりである。

4～6月はべと病の被害が多くなるので、葉面へのかん水を控えるなど過湿対策を行い、発生前にはZボルドー(500倍/—/—)で防除する。  
\*Zボルドーは、野菜類で登録がある。



農業の登録内容は頻繁に変更されます。農業は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/>)

## 非結球あぶらな科葉菜類 (こまつな、しろな、みずな等)

### ◆病害虫防除

ハウスでは白さび病の発生が多くなるので、は種量を適正にし、密植にならないように注意する。発生時には、初期にランマンフロアブル(2000倍)／収穫3日前まで／3回以内)で防除する。



## 果樹

### みかん

### ◆苗木の定植

植えた苗木を早く大きくするには、大きな円柱形の植え穴を掘り(直径1m、深さ1m)下層部にヨウリンや完熟堆肥、苦土石灰などを入れて埋め戻す。植え付け時には根を乾燥させないように、根を四方に広げて盛り土をし、定植後は支柱を立てて十分かん水する。植え付け後、いづらか陥没するため、深植えにならないように(接ぎ木部が土の中に埋まると樹勢が弱る)注意する。

特に、一年生苗を植える場合

は、30cmくらいの所で切り返して、支柱を立てる。苗が細かい場合は、もつと短く20cmくらいまで切り返す。長く残して切り返す場合や、あるいは切り返さない場合には弱い枝が多く出て主枝にする強い枝が出ない。

### ◆病害虫防除

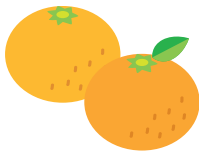
そうか病は、発芽直後から新葉で発病し、幼果に感染し傷果になるため、昨年発生の多かった園では、発芽期にデランフロアブル(1000倍)／収穫30日前まで／3回以内)または、トップジンM水和剤(1000)／1500倍)／収穫前日まで／5回以内)を散布する。

なお、3月にマシン油剤を散布した園では、葉害を避けるためデランフロアブルとの散布間隔を約1カ月空けるようにする。  
\*デランフロアブルは、かんきつで登録がある。

### もも

### ◆摘蕾・摘花

ももは着果数の20〜30倍の花をつける。全て開花・結実させると養分が不足し、新梢の伸び



や果実の肥大が悪くなる。花粉の多い白鳳などの品種を中心に作業を行う。結実の悪い清水白桃などは、結実を確保するため、残す蕾の位置は、結果枝の長さで異なるが、どの場合でも枝の基部や上向きの蕾は全て摘み取り、葉芽近くにある蕾を残す。

### ◆病害虫防除

落花後、黒星病の予防にベルクト水和剤(2000倍)／収穫前日まで／3回以内)を、また、灰星病、うどんこ病の予防にもベルクト水和剤(1000)／2000倍)／収穫前日まで／3回以内)を散布する。アブラムシ類、シンクイムシ類の防除にはハチハチフロアブル(2000倍)／収穫前日まで／2回以内)を、また、モモハモグリガの防除にはアデオン乳剤(2000)／4000倍)／収穫7日前まで／6回以内)を散布する。なお、せん孔細菌病の多発園ではバリダシン液剤5(5000倍)／収穫7日前まで／4回以内)を散布する。

### うめ

### ◆実肥

果実があずき粒大に肥大した頃に1回目の生理落果があり、この生理落果が終わる4月中旬頃に10a当たりいずみの化成88を20kg、硫加10kgを施用する。

### ◆病害虫防除

アブラムシ類が発生しやすくなる。葉が巻いてからでは遅いので、発生初期にアデオン乳剤(3000倍)／収穫前日まで／2回以内)を散布する。果実表面がかさぶた状になるかいう病の多発園では、マイコシールド(1500倍)／収穫21日前まで／4回以内)を散布する。4月下旬には果実表面に黒い斑点がでる黒星病対策には、トップジンM水和剤(1000)／1500倍)／収穫21日前まで／3回以内)を散布する。  
\*トップジンM水和剤は、小粒核果類で登録がある。



\*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数)／使用時期)／総使用回数)を表示しています。

表1 たまねぎのべと病、白色疫病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たり散布液量
リドミルゴールドMZ	M 03、4	1000倍	収穫7日前まで/3回以内	100~300ℓ/10a
ホライズンドライフフロアブル	11、27	2500倍	収穫3日前まで/3回以内	100~300ℓ/10a
プロポーズ顆粒水和剤	40、M05	1000倍	収穫7日前まで/3回以内	100~300ℓ/10a
ランマンフロアブル	21	2000倍	収穫7日前まで/4回以内	100~300ℓ/10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表2 なすのアブラムシ類に登録がある農薬

薬剤名	IRACコード	使用量	使用時期/使用回数/使用方法
アルバリン粒剤	4A	1g/株	定植時/1回/植穴土壌混和
アドマイヤー1粒剤	4A	1~2g/株	定植時/1回/植穴または株元土壌混和
ジェイエース粒剤	1B	1~2g/株	定植時/1回/作条散布または植穴処理

※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3 ねぎのさび病に登録がある農薬

薬剤名	FRACコード	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たり散布液量
ベンコゼブ水和剤	M03	600倍	収穫14日前まで/3回以内	100~300ℓ/10a
アミスター20フロアブル	11	2000倍	収穫3日前まで/4回以内	100~300ℓ/10a
ラリー水和剤	3	2000倍	収穫7日前まで/3回以内	150~300ℓ/10a
パレード20フロアブル	7	2000倍	収穫前日まで/3回以内	100~300ℓ/10a
ベルコート水和剤	M07	2000倍	収穫30日前まで/3回以内	100~300ℓ/10a

※FRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

※アミスター20フロアブルでは、浸透性を高める効果のある展着剤(ニーズ等)を混用すると薬害を生じる場合があるので、事前に確認する。

表4 しゅんぎくのマメハモグリバエに登録がある農薬

薬剤名	IRACコード	希釈倍数・使用量(使用方法)	使用時期/使用回数	10a当たり散布液量
ベストガード粒剤	4A	9kg/10a (生育期株元処理)	収穫3日前まで/1回	-
アフファーム乳剤	6	2000倍	収穫7日前まで/2回以内	100~300ℓ/10a
カスケード乳剤	15	2000~4000倍	収穫7日前まで/2回以内	100~300ℓ/10a
トリガード液剤	17	1000倍	収穫7日前まで/2回以内	100~300ℓ/10a

※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

※アフファーム乳剤・トリガード液剤は、ハモグリバエ類で登録がある。



平成18年5月より、農薬の残留基準値を厳しく規制する「ポジティブリスト制度」が施行されましたが、その後も、各地域で多くの事故が発生しています。農薬の使用責任は生産者です。「安全・安心」な農産物を提供するために、農薬使用基準の順守は当然のことですが、農産物生産者のリスクを減らすためにも、生産履歴を必ず記帳し、農薬散布の際には十分にご注意ください。

※家庭菜園でも、飛散による周辺農作物への影響がないかを十分ご確認の上、農薬を使用されるようお願いいたします。

**農薬の散布に  
十分ご注意ください！**